



『共感』——「アーモンド」 (ソン・ウォンピヨン著)を読んで

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。

久し振りに小説を読むことができた。最近は、遅まきながらユヴァル・ノア・ハラリ氏の「サピエンス全史」、「ホモ・デウス」、「21世紀の人類のための21の思考」の三部作を読み耽っていたが、作者が日本人ではない韓国人の作家の小説本を手に取るのは久し振りである。この本は、先天的に脳内の扁桃体が小さく、大脑辺縁系と前頭葉の間の連絡がうまくいかないため失感情症(アレキシア)と診断され、自らの感情をあまり感じることができず、周りの人の感情すらもよく理解できないソン・ウンジュという男の子と、幼き頃に親からはぐれてしまい他人に育てられ、少年院送致の前歴もある不良少年で、同級生ともなじめない」という男の子との間の友情物語と評することができる。

この小説の翻訳家である矢島暁子さんは、「アーモンド」が描く学校生活や社会生活の背景には、短期間に急成長した韓国社会における「競争」という視点が強くあると述べている。「厳しい受験競争」や「就職戦線」、人に先んじなければ生き残れず、「他人の痛みに寄りそうど

ろか、自然な感情さえ持つていては生きづらい社会」の中で、ソン・ウンジュと「ゴー」との間のやり取りや触れ合いを通じ、私たちが、どのようにして「共感」というものを育んでいくのかを問われている感じがした。

「共感」とは、まさに人ととの直接的なやり取りや触れ合いを通じて育っていく「感じる力」なのだろう。そこには、もちろん定まった答え、周りから納得される解答などない。どれほどやり取りに時間をかけ、どれほど触れ合ったとしても、その「共感」の内容 자체が一方通行にしかならぬことが多いであろうが、しかし、仮にそうであつたとしても、そこで感じた「共感」自体が色あせるることは決してない。「感じても行動せず、共感する」といながら簡単に忘れていく日々の生活に、小さいながらも自分のくさびを毎日打ち込んでいくことが必要だとと思う。

しかし、私たちの日常生活はどうか。十分な医療施設や機器がないアメリカ諸国において急速に新型コロナの感染が広がっていく報道や、我が国における豪雨や台風災害の報道がなされても、何か遠くで起きる生活のやり取りがほとんどなく、それが表面的で、自分という人間の実像を隠し続け、都合のいい表面的な自分像を作り上げて他人とつながっているにすぎない。

令和2年9月3日、ユーロセフを通じて、いわゆる先進国や新興国などを38カ国を対象にして「子どもの幸福度」を調査した結果が公表された。1位はオランダ、2位はデンマーク、3位はノルウェーなどヨーロッパ諸国が上位を占めており、日本は38カ国中20位であった。我が国は子どもの肥満の割合や死亡率から算出した身体的健康は1位であり、失業率も低く、子どもの貧困率も低いことなどが、どちら、経済的には比較的恵まれているという結果が出ていたが、いる。論者の中には、日本の学校現場を「いじめ地獄」と表現し、偏差値偏重による受験競争過熱も相まって

た、幸いにも自分とは関わりが薄い間での触れ合いがどんどんと少なくなり、その一部を学校側に押しつけた傾向はないか。もちろん、学校側が家庭の役割の一部を果たす余裕など今更ながらない。家族も疲れてしまい、教師も疲れている。何となく感じる日々の閉塞感の中で、私たち日本人はその閉塞感を打破するためなのか、単なる欲求なのか、徐々に物質依存が強くなつてはいいのか。

しかし、私たちがより満足のいく家庭生活を送っているわけではない。自らの心の中、家庭の中にある空洞を物質で埋めることができると思っているのであれば、それは虚構の世界の話にしか過ぎない。人と人との触れ合いで育つていく「感じる力」(=共感)というものを、日々の生活中で私は一つひとつ増やしていくべきだと思ふ。